

水稻病虫害防除対策（7月）

※農薬の登録内容については慎重に校閲していますが、登録内容の変更は随時行われています。また、同じ農薬名でも農薬会社によって登録内容が異なることがありますので、農薬登録情報提供システムホームページ (<https://pesticide.maff.go.jp/>) 等で最新の登録内容を確認してください。（記載中の登録内容は令和3年7月20日現在）

1 いもち病（穂いもち）

- (1) 7月上旬の調査では、県内の葉いもちの発生ほ場割合や発生程度は全般的に平年より低い状況でした。
- (2) 育苗箱施用剤を施用したほ場でも、薬剤の効果がしだいに低下しはじめているので、ほ場の発生状況を確認してください。
- (3) 葉いもちの発生が認められるほ場では、早急に散布剤による防除を行ってください。
- (4) 穂いもち対象の水面施用剤は、各薬剤の使用時期を逃さずに施用してください（表2）。
- (5) 散布剤で穂いもち防除を行う場合は、穂ばらみ末期と穂揃期の2回散布を基本に実施して下さい。穂いもちが多発するおそれがある場合には、さらに傾穂期に追加散布を行ってください。
- (6) オリブライト1キロ粒剤は急激な温度上昇が起こる気象条件では、葉斑を生じやすいので注意しましょう。アミスターエイトはリンゴの一部品種に葉害を発生させるのでリンゴにかからないようにしてください。
- (7) 水面施用剤を散布する場合には、各薬剤の施用適期に湛水して、所定量を均一に施用し、その後7日間は落水・かけ流しをしないでください。

表1 穂いもちの防除薬剤・水面施用剤（粒剤、パック剤、ジャンボ剤）

剤型	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	10a当たり使用量	使用回数 の制限※
粒剤、 パック 剤、 ジャン ボ剤	キタジンP粒剤	IBP	F2	出穂10日前	3～5kg	2回以内
	コラトップ粒剤5	ビロキロン	I1	出穂15～10日前	3～4kg	2回以内
	コラトップ1キロ粒剤12			出穂15～10日前	1～1.5kg	
	コラトップジャンボP			出穂15～10日前	小包装(パック)10～ 13個(500～650g)	
	フジワン粒剤			イブプロホラン	F2	

表2 いもち病（葉いもち、穂いもち）の防除薬剤（茎葉散布剤）

剤型	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a当たり 使用量(散布液量) (注)	使用回数 の制限※
粉剤	ノンプラス粉剤DL	トリシクラズール	I1	収穫7日前まで	3～4kg	2回以内
		フェリムゾン	U14			
	ブラシン粉剤DL	フェリムゾン	U14			
液剤、乳剤、 フロアブル 剤、ゾル剤	アミスターエイト	アゾキシストロビン	C3	収穫14日前まで	1,000～1,500倍 (100～200L)	3回以内
	カスミン液剤	カスガマイシン	D3	穂揃期まで	1,000倍	2回以内
	ノンプラスフロアブル	トリシクラズール	I1	収穫7日前まで	1,000倍 (60～150L)	2回以内
		フェリムゾン	U14			
	ビームゾル	トリシクラズール	I1	収穫7日前まで	1,000倍	3回以内
	フジワン乳剤	イソプロチオラン	F2	収穫14日前まで	1,000倍 (60～150L)	2回以内
	ブラシンフロアブル	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	1,000倍 (60～150L)	2回以内
フサライド		I1				

(注) 液剤、水和剤、乳剤、フロアブル剤の散布液量は、農薬ラベルに記載がない場合、10a当たり140～150L散布する。

表3 無人ヘリコプター（無人航空機）散布によるいもち病の防除薬剤

剤型	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり散布液量	使用回数 の制限※
乳剤、ゾル剤	アミスターエイト	アゾキシストロビン	C3	収穫14日前まで	8倍、0.8L	3回以内
	ビームゾル	トリシクラゾール	I1	収穫7日前まで	6~8倍、0.8L	3回以内
	フジワン乳剤	イソプロチオラン	F2	収穫14日前まで	8倍、0.8L	2回以内
	ブラシンゾル	フェリムゾン	U14	収穫7日前まで	8倍、0.8L	2回以内
フサライド		I1				
剤粒	コラトップ剤粒24	ピロキロン	I1	穂いもちに対しては 出穂30日前~5日前 まで	0.5kg	2回以内
	コラトップ1キロ剤粒 12				1kg	

※ 使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・ I B P を含む農薬の総使用回数：3回以内（粒剤は2回以内）
- ・ ピロキロンを含む農薬の総使用回数：3回以内（但し、直播では種時又は移植時までの処理は1回以内、本田では2回以内）
- ・ イソプロチオランを含む農薬の総使用回数：3回以内（但し、移植前は1回以内、本田では2回以内）
- ・ トリシクラゾールを含む農薬の総使用回数：4回以内（但し、育苗箱への処理は1回以内、本田では3回以内）
- ・ フェリムゾンを含む農薬の総使用回数：2回以内
- ・ フサライドを含む農薬の総使用回数：3回以内
- ・ アゾキシストロビンを含む農薬の総使用回数：4回以内（但し、育苗箱散布は1回以内、本田では3回以内）
- ・ カスガマイシンを含む農薬の総使用回数：4回以内（但し、種子浸漬は1回以内、育苗箱への処理は1回以内、本田では2回以内）
- ・ イソチアニルを含む農薬の総使用回数：3回以内（但し、直播での播種又は移植時までの処理は1回以内、本田では2回以内）
- ・ プロベナゾールを含む農薬の総使用回数：2回以内（但し、移植時までの処理は1回以内）
- ・ メトミノストロビンを含む農薬の総使用回数：1回

2 紋枯病

- （1）本病は、前年病斑上に形成押された菌核が地表に落下し第一次伝染源になるため、昨年発生が多かったほ場や風下の畦畔沿いに発生しやすいです。
- （2）幼穂形成期頃に水際の葉鞘に発病し、上位葉鞘に病斑が進展します。
- （3）密植や窒素成分の多いほ場では発病しやすくなります。
- （4）高温多湿が続くと上位葉鞘への進展が激しくなり、第3葉鞘以上の葉鞘に発病して葉が枯れると減収などに結びつきます。また、茎が弱くなり倒伏しやすくなります。
- （5）出穂後も高温多雨が続くときは、止葉葉鞘に上がり穂が枯れる恐れがあります。
- （6）防除は、散布剤では上位葉鞘へ進展する前の穂ばらみ期に行います。多発の兆候が見られたら、穂揃い期に2回目の茎葉散布を行います。
- （7）オリブライト1キロ剤は急激な温度上昇が起こる気象条件では、葉斑を生じやすいので注意しましょう。アミスターエイトはリンゴの一部品種に葉害を発生させるのでリンゴにかからないようにしてください。

表4 紋枯病の防除薬剤

剤型	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり散布液量	使用回数 の制限※
水面施用剤	オリブライト1キロ剤 剤	メトミノストロビン	C3	出穂10日前まで (収穫45日前まで)	1kg	1回
	モンガリット剤	シメコナゾール	G1	出穂28~14日前 (収穫45日前まで)	3~4kg	2回
	リンバー剤	フラメトピル	C2	出穂30~10日前 (収穫30日前まで)	3~4kg	2回
散布剤	アミスターエイト	アゾキシストロビン	C3	収穫14日前まで	1,000~1,500倍	3回
	バリダシン液剤5	バリダマイシン	U18	収穫14日前まで	1,000倍	5回
	モンカットファイン粉 剤20DL	フルトラニル	C2	収穫14日前まで	3~4kg	3回

※ 使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・ メトミノストロビンを含む農薬の総使用回数：1回
- ・ シメコナゾールを含む農薬の総使用回数：2回以内（移植時までの処理は1回以内）
- ・ フラメトピルを含む農薬の総使用回数：2回以内（直播では種時又は移植時までの処理は1回以内）

- ・アズキシストロピンを含む農薬の総使用回数：4回以内(但し、育苗箱散布は1回以内、本田では3回以内)
- ・バリダマイシンを含む農薬の総使用回数：6回以内(育苗箱灌注は1回以内、本田では5回以内)
- ・フルトラニルを含む農薬の総使用回数：3回以内(小包装投入は1回以内)

3 稲こうじ病

- (1) 稲こうじ病は、穂ばらみ期の低温、降雨の多い場合や窒素過多のほ場で発生しやすい病害です。
- (2) 常発地帯では、ほ場の土壌中に菌が常在しており、田植後早い段階から稲体に侵入し、穂ばらみ期に降雨や日照不足などの条件が整えば穂で発病します。天候予報などで穂ばらみ期に降雨が予想される場合は、出穂前に薬剤防除してください(表4)。
- (3) 銅を含む薬剤は葉が濡れている場合は薬害を生じやすいです。銅を含む薬剤を散布する場合は出穂10日前までとします。

表5 稲こうじ病の防除薬剤

剤型	薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり散布液量	使用回数 の制限※
水面施用剤	モンガリット粒剤	シメコナゾール	G1	出穂21～14日前 (収穫45日前まで)	3～4kg	2回
散布剤	Zボルドー粉剤DL	銅	M1	出穂20～10日前	3～4kg	—

※ 使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・シメコナゾールを含む農薬の総使用回数：2回以内(移植時までの処理は1回以内)

4 イネアオムシ(フタオビコヤガ)

- (1) 本虫は多化性で、本県では7月下旬、8月下旬に発蛾最盛期になっています。その10日頃から幼虫の被害が目立ってきます。特に、穂ばらみ期から出穂期にかけて幼虫の被害が多くなってきて、止葉が食害されることもあります。
- (2) 窒素過多による過繁茂なほ場、幼虫期に曇雨天が多い年、山間地など風通しの悪い地域などでは発生が多くなりやすいので発生に注意してください。
- (3) 防除は、7月下旬～8月にかすり状の食害が見られたら行ってください。

表6 イネアオムシの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり散布液量	使用回数 の制限※
スミチオン乳剤	MEP	1B	収穫21日前	2,000～4,000倍	2回

※ 使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・MEPを含む農薬の総使用回数：3回以内(種もみへの処理は1回以内、育苗箱散布は1回以内、本田では2回以内)

5 ヒメトビウンカ

- (1) 本虫はイネ縞葉枯病などのウイルス病を媒介するので、これらの病害が発生しているほ場では本虫の防除を行うことが大切です。
- (2) イネ縞葉枯病の感染時期は、定植から幼穂形成期までなので、6月下旬から7月上旬に本虫の防除を行いましょう。特に、麦畑に近接した水田では早期から侵入するので、早めの防除を行ってください。

表7 ヒメトビウンカの防除薬剤

薬剤名	有効成分名	薬剤系統	使用時期 (収穫前日数)	使用濃度、10a 当たり散布液量	使用回数 の制限※
スミチオン乳剤	MEP	1B	収穫21日前	1,000倍	2回
マラソン乳剤	マラソン	1B	収穫7日前	2,000倍	5回

※ 使用回数の制限の欄は、その剤の使用回数であり、使用する際には成分ごとの総使用回数を確認すること。

- ・MEPを含む農薬の総使用回数：3回以内(種もみへの処理は1回以内、育苗箱散布は1回以内、本田では2回以内)
- ・マラソンを含む農薬の総使用回数：5回